

海野健三

設計と施工を分離することなど、考えられない。海野健三さんはそういう机上でデザインをするだけでなく、自らも棟梁のように現場に立つ。職人たちと共に手を動かし、家をつくり上げていく。自分でつくり、責任を持つこと。それは、生きている実感を感じることでもあるという。海野さんの家づくりは、自身の人生観にもつながっている。

つくるということは、何でも好きだったんです。何をやっていくかを考えたとき、絵や彫刻など、ひとりの世界にこもってやるというのも捨てがたかったのですが、それを一生ついでという物足りなくて。建築っていうのは、設計はひとりですみますが、つくるにはいろんな人のコミュニケーション、つまり人間関係が必要じゃないですか。そんなところに魅力を感じたんですね。今、私が施工までやっているというのは、そのへんに原点があるんじゃないかな。

私は、設計も施工も含めて建築だと思っています。分離することなんか考えられない。それにイメージとしては、つくる方(施工)が主流。もちろん、設計はしないといけないのですが、彫刻家にしても、つくる前にはデッサンをするじゃないですか。それが、私にとっての設計なんですよ。実際につくる場所は現場、図面は、ちよつと語弊があるけど、私にとってはメモですね。

設計も施工もやりたかったから、初めは設計事務所に勤めました。でも、設計だけはつまらないと思った。次に施工会社に入って現場も勉強して、現場だけつまらないと思った。だから、独立して両方やっているわけです。住宅ぐらいの規模なら、設計と施工をトータルでやるのにちょうどいい。これがビルとかになると、図面しかできませんけどね(笑)。住宅をつくる人間関係には、建て主も加わりますよね。そうすると、建て主とのコミ

ュニケーションも生まれて、楽しいんです。建築という芸術が、人との関わりの中で生まれてくる。これは、一生やってても飽きないだろうなって思います。

施工までやると、設計の不備が非常によくわかるんですよ。だから、「先生は誰？」って聞かれたら、私は「現場が先生」と答える。自分でやった設計を実際に自分でつくってみると、「こんなんじゃないか」「こんなじゃないか」ってなることがあって、そこから教えられる。現場にいれば、もつといやり方がないかを考えられる。それは机上で設計だけしていると、全然わからないことです。現場で教わったことは図面にもフィードバックできます。するとね、とてもいいもの、というか嘘のないものができるんです。

施工の段階では職人さんを使いますから、自身は棟梁的な立場にあります。でも、本当はね、自分で全部やりたい(笑)。基礎から塗装から溶接から何から何までね。要するに、自分で1軒の家を全部つくりたい。でも、それは不可能だから、みんなに協力してもらおう。そのコミュニケーションもおもしろいんですけどね。現場には頻繁に行きます。設計監理で行くとか、そんなもんじゃない。手を動かすに行く。時間があれば、ずっとやっていたいんです。その方が、つくっているっていう実感があるから。



Photographs/五十嵐真(人物)・松本保(住宅)
text/原ユキミ

A R C H I T E C T



Profile

1949年東京都生まれ。74年東京理科大学卒。設計事務所、建設会社勤務を経て、'80年海建築家工房設立。設計から施工までをトータルで行う。

連絡先●海建築家工房
東京都江東区扇橋2-24-2
TEL.03-3648-8486

Kenzo UNNO

私にとつての先生は、「現場」である

施工をする(こと)で、数多くの(こと)を学んできた



海運工場の螺旋階段。事務所もセルフビルドだ。

自宅も1年かけてセルフビルド 欲しいものは何でも自分でつくりたい

自宅もセルフビルドなんです。以前は、こんなにつくったら何で言われるかなって、人の目を気にしていたんですよ。踏み違いの階段や曲がったドアなどはすぐイメージに出てくるんだけど、人の家ではできないし……と思っていた。そんなやりたいイメージを、全部自分の家です。施工のうち、基礎と柱梁、当時自分でできなかった屋根の板金工事はやってもらいましたが、あとはほとんどひとりでやりました。1年ぐらいかかりましたね。でも、「やった」という喜びはない(笑)。というのはね、自宅をつくっていたときの気分分っていたのが、(他の家をつくることに)ずっと継続しているから。

私はヨットも自分でつくったんですが、結局ね、生きていく上で欲しいもの、必要なものが出てくるじゃないですか。基本的には、そういうものを自分で全部つくりたいんです。自分の生活を自分で構築していきたいから、自分の専門で働いて、金を儲けて、その金で専門家に頼んだ方が何でも効率がいいわけだけど、私にはそうじゃないんだな、という気持ちがあるんです。自分でつくっていくことに、自分の命を生きていることを感じるから、原始的な生き方が好きなんだよね。何か問題があっても、誰かの処理がなくても、自分で解決していける。そんな

うんですが、URC工法でやれば確実にその半分になる。世の中にもセルフビルドが広がればいいなと思ってます。今までにこの方法で2人の方が自分で家を建てました。もちろん素人。あまりにも簡単にできるので、2人もびつくりしていましたね。

趣味は、唯一ヨットですね。学生時代からやっているんです。ヨットは西伊豆に置いてあるんだけど、週末も忙しくて最近なかなか行けない。前はね、ズーッと乗ってれば、アメリカ大陸まで行けるとか、そんなイメージがあつて船と海が好きだったんです。でも、最近そんなに長距離はできなくて、水遊び(笑)。

私はね、海の世界と陸の世界があると考えているんです。海の世界では、自分のつくった船で海原に出ていく。何かあっても全部自分の責任。だけど、陸の世界では、たとえば、車の構造を知らなくても運転はできるし、故障すればJAFなんかを呼べばいい。もしぶつけて事故になっても保険で全部処理してくれる。でも、私は自分の道を切り開きながら、一歩一歩全部自分で責任を持つ生き方をしたい。何かあっても自分のせい。要するに純粋な命っていうのかな、そういうのがある海の世界が好きなんですよね。



ウッドサークル●丸太や柱に囲まれた、木の魅力にあふれる住まい。

URC工法●海野さんが考案したURC工法(海野式RC工法)の壁面(写真右)。従来のRC工法で使うコンクリート型枠用合板の代わりに養生ネット(写真右小)を活用し、コンクリートを打つ。外断熱のコンクリート壁を一気に完成でき、単純な作業はローコストにもつながる。



命の安定とか、強さとか、そういう手応えが欲しいんです。家をつくる時に一番大切なものは、もちろん、建て主さんが幸せになること。それに尽きる。でも、言いなりではいけないんです。夢や希望を聞いて編集するわけですね。つまらなかったら味付けしたり。その方が、たぶん実際に住んでみたときにいいと思うんですよ。建て主さんとの話し合いは設計段階から密にしますね。というか、話し合いができる人じゃないとダメですよ。『任せます、任せます』と言う人とはいい家がつくれな。自分がどうしたいのかわからなくてもいいんですよ。どこがわからないかをきちんと言ってくれることが大切なんです。



大震災をきっかけに開発したURC工法 被災地での活用を普及させたい

ローコストで簡単にできるURC工法を考案したのは、阪神淡路大震災がきっかけなんです。建築家である自分が何も力になれないというのを感じて……。もし、自分が震災に遭ったら何を考えるか考えてみたんですが、私は自分の手で家をつくるだろうと思っただけです。セルフビルドっていうと、だいたい木造になるんですが、木造で耐震性を持たせるのは専門知識がないと難しい。ツーバイフォーは丈夫だけどテーマにするにはおもしろくない。セルフビルドには無理かな、っていう感じがあつた。コンクリート造をやってみたら、すると、コンクリートのせき板は意外と穴が大きくても漏らないし、いろいろと試しているうちに、随分といいかげんにやってもいいもんだなっていうことがわかった。いろんな素材で型枠ができるんじゃないかなと、養生ネットで強度試験をしてみた。これがいけたんだよね。コンクリートの外断熱工法は、今、坪単価で100万ではできないと思

たとえば、家はメーカー製のものをいろいろ取り寄せてつくることもできるわけです。もし、壊れてもメーカーにクレームをつけることができ、設計者は責任をとらない。そういうのは、私はつくっているという気持ちがないんです。もっと自分でしかつけれないもの、結局はリスクが自分にあるもの。そういうことが本当の意味でつくるということだと思っただけです。それは、命の原点が残る。海、の設計だと考えているんです。でも、ほとんどの人は、陸、の設計をやっている。

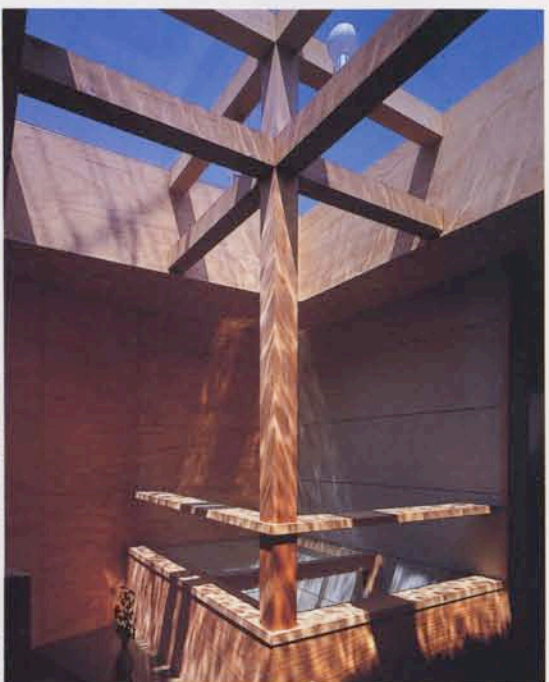
本当は食べるものも自分でつくりたいんです。だから、郊外に移って自給自足の生活というのでもいいなと思っっているんですよ。厚木の山の麓に土地を借りているんですが、そこに小屋を建てて、仕事をしながら野菜をつくって過ごそうかななんて。厚木だと、ヨットを置いている伊豆にも近いし(笑)。

これからも、今までのように住宅をつくることを中心にやっていきたいですね。それに加えて、URC工法を普及させたい。発案の発端となったのが震災ですから、被災地でもどんどん活用してもらえようになればいいなと思います。建築も、表面的なデザインだけでなく、URC工法のように、内部に精神を秘めているという存在理由があるものを追求していきたいですね。

家づくりで大切なのは、住む人が幸せになること 建て主さんとちゃんと話し合おう、いい家ができる



M邸●真鍮、ガラス、珪藻土と、それぞれの素材が彩る外観。



ウッドサークル●トップライトのガラス面に水を張る。

